

師の死に思う 医者 石飛幸三の使命



長尾和宏(ながおかずひろ)
医学博士。公益財団法人日本
尊厳死協会副理事長としてリビ
ング・ウィルの啓発を行う。映画
『痛くない死に方』『けったいな
町医者』をはじめ出版や配信な
どさまざまなメディアで長年の
町医者経験を活かした医療情報
を発信する傍ら、ときどき音楽
ライブも。

374 医師 石飛幸三

年をとるといことは「他者の死に慣れていく」ことでもあると実感する今日この頃です。還暦を過ぎると友人の訃報がぼつぼつ届くようになる。昔ほどショックを受けることはなく、ああアイツも逝ったのかと、一緒に船旅をしていた人が先に下船してしまったような心境に。しかし、師と仰いでいた人の訃報は、また少し違う気持ちになります。「後はお前がしっかりやれよ」。そんな声が聞こえてきて、背筋を正すのです。

僕の心の師、医師の石飛(いしとび)幸三氏が今年7月に亡くなりました。昭和10年生まれですから、享年は88か89だったはず。死因もわかりません。テレビやラジオに多く出演する有名医だったのにもかかわらず、訃報記事がどこを探しても



見つからない——そんなことってあるの？ だから僕がここに追悼を書きます。

石飛幸三先生が有名になられたのは2010年、『「平穏死」のすすめ』(講談社)という本の出版からだと記憶しています。05年から東京にある特別養護老人ホームの常勤医でした。

施設で穏やかに枯れるように終末期を迎えた人に対し「とことん治療をして」「食べられなくなったら胃ろうを」と願う家族が多くいる。終末期の延命治療は、かえって苦しむことがわかっているのに、過剰な医療を施すことを多くの医師が「是」と思っている。

あるとき石飛先生にこう伝えました。「在宅看取りであれば平穏死は叶います」。そして、在宅医の視点から僕が12年に上梓してベストセラーになったのが、『「平穏死」10の条件 胃ろう、抗がん剤、延命治療いつやめますか?』(ブックマン社)です。

石飛先生よりさらに踏み込んだからでしょうか、医療界からたくさん石を投げられました。延命治療は正義と思っている医者にとって、僕は

地動説を唱えたガリレオ・ガリレイに見えたのでしょう。石飛先生は僕を励ましてくれました。「いろんな意見があってもいいんだ。批判は甘んじて受けなさい」

あれから12年。医療崩壊は進み、コロナ禍によって分断は大きくなるばかり。在宅医療にも金儲(もう)けで参入する企業が増えてきました。在宅死が増えたように見えても、それは孤独死だったり、医療から見放された人の死だったり。僕は医療に絶望し現場から卒業しました。こんな状況のなかで、わが師・石飛幸三がいなくなった——「まだ諦めてはダメですよ」と言われたような気がします。

先生はよくこう言っていました。医者にとっての2つの使命とは「責任を持つこと」と「気持ちを支えること」であると。この2つのメッセージを、僕が若い世代に繋(つな)いでいけたらいいのですが。